

われわれの未来へ（第10回）

小野 晴巳（地球冒険学校準備会顧問）



1. 過去から学ぶ難しさーアジア・太平洋戦争 インパール作戦(7)

5月24日、東大知市遺族会の長から突然惠認がありました。内容は「8月15日の全国戦没者全国大会の東大和市の枠(1名)の選出を三役に一任してほしい。」という話でした。もちろん委任しました。

真夏の8月15日 正午からテレビ放送される全国戦没者全国大会は、日本人なら誰でも知っている儀式ですし、この日は終戦記念日(私にとっては敗戦記念日)ということ絶対に忘れてはいけない日です。(本音を言えば祝日ではない国が定めた休日にして欲しいと思っています)

会場には各県代表の遺族関係者が出席しますが、その選考は決まっています。東京の場合は、都に割り当てられた人数が各市町村に配分され、各市町村が独自に決めています。最近では、出席者が子どもから孫へと拡がっている現状です。遺児の一人として、年々戦争を直接・間接的に経験している人が減少していることにさびしさ以上の感情をもっています。

そして、今の世界情勢に目を向けてみると、戦争や内乱により苦しむ人たちがたくさんいます。そのような中、ウクライナからの避難者を温かく迎え入れ援助も惜しまない日本人の姿勢はうれしい限りです。同じように世界から日本に避難している外国人に対しても温かく対応してほしいと思います。そして、国軍のクーデター後の内戦と日本に避難しているミャンマー人の事も忘れてほしい。特に入管法の改正により、日本における難民の処遇がさらに後退したと非難されないかと心配です。

さて、そのミャンマー国についてですが10年前はどのように報道され伝えられていたのか？この疑問に答えられる本を偶然手に入れることができました。現在(2023年)と10年前(2013年)の落差にびっくりしました。著者は、日本貿易振興機構アジア研究所の職員です。(以下は書籍より)

2013年、日本は空前のミャンマーブームが起きていた。

- ・アジア 最後のフロンティア
- ・ミャンマーはこれから世界の主役になる
- ・「経済特区」により整備され、日本企業進出が一気に増加する
- ・ミャンマーの民主化は後戻りしない
- ・「法の整備により安心して資本投資が可能になる (以下略)」

このように、現在から見れば信じられないくらい楽観的でした。クーデターがなければ驚異的に発展したでしょう。それを止めた国軍が全て悪いと断定できます。そこで、私が言いたいのは「過去から学ぶ」難しさです。

たとえばアウンサンスーチ氏によりミャンマー国は発展し、ノーベル平和賞を受賞しました。そのアウンサンスーチ氏さえ「ロヒンギャ問題」については明確な救いの方針も事実さえも言及しませんでした。自

身も迫害を受け、苦しく大変だった経験をもちながらもこの問題を避けたのです。この例からも「過去から学ぶ難しさ」と「現実と向き合う」場合の複雑さが理解できると思います。

日本の場合です。

G7をヒロシマで開催しながら、原爆資料館の本館を見学せず、説明の内容も非公開でした。非核宣言も全ての国の核使用に反対ではなく、ロシア・中国などの特定の国に対してだけ核使用反対でした。私は被爆者の声を聞いたり、核の恐ろしさを知ったりしているだけに、もっと前進した宣言にと思い残念です。

現実にはウクライナ侵攻、領土侵犯、ミサイル発射などあれば、防衛費増額、軍備装備の充実など、戦争につながる政策に賛成したくなる気持は理解できます。そこで言いたいのは、「過去から学んでほしい」ということです。あの戦争後の悲惨さ、困窮、人間性の喪失、残酷さなど想像してください。「平和を願い、未来を担う子どもたちが幸せに暮らせる世の中」を作りたいという気持はもち続けたい。

※参考図書 工藤年博著「ミャンマー早わかり・・・1時間でわかる」(2013年2月中経出版)

2. 現在の息苦しさ—牧野富太郎氏に学ぶ—



朝のテレビ小説「らんまん」は牧野富太郎をモデルにした放送番組です。モデルの牧野富太郎はとても興味深い人物なので紹介したくなりました。

私は理科の教員でした。理科の教員免所状は専門科目として、いわゆる物理学化学、生物学、地学の単位が必要です。高度な専門というよりは、広い知識と正しい科学的指導力を必要とします。単位を取得するには、それぞれの実験・実習が必須でした。

たとえば、生物学では実習として植物採集がありました。植物採集をした後は、植物標本とレポートを提出します。採集した植物の名前、学名を記入して提出するのですが、あまり名前を知らないで苦労しました。その時に役に立ったのが牧野富太郎著『学生版牧野日本植物図鑑』です。その時は白黒版だったので同定(植物の所属を決定すること)するのに大変でした。植物スケッチが詳細で内容がとても詳しいことで有名な本でした。

牧野博士の学生時代(1960年～)の生物学は、植物分類学が主流の一角を占めていました。その第一人者で「日本植物学の父」「植物の神様といわれた男」などとして尊敬されていました。

小学校中退で博士になり、東大で教え、文化功労章、文化勲章を受章した経歴で知られています。この辺の背景を知ると、現在の日本と重なる部分と課題がみえますので、超簡単に書いてみます。牧野富太郎博士の生涯とエピソード(1862-1951年)

○その1 なぜ「小学校中退」?

1872(明治5)年に学制が制定され、小学校入学が義務化されます。牧野博士も入学しますが、もう12歳になっていました。当然入学すれば「読み書き算」から始まります。そんなのバカらしい。時間の無駄ダ!!」と言って、牧野博士は辞めてしまいました。牧野の実家は超裕福な酒屋(あとで牧野は没落させる)

だったので、武士にしか許されない藩校ですでに学ぶことができていました。講義内容も現在の高校レベル、科目によっては大学教養レベルといわれています。成績も優秀でした。

○その2 なぜ「博士」になれたか？

牧野博士の業績は素晴らしく、東大教授でさえ一目置くほどでした。本人よりも周囲の人が博士号を取らせたのです。

○その3 なぜ「東大で講師として77歳まで勤務できたのか？」

若くして東大植物学教室に自由に出入するようになり、植物に関する知識深め標本を集めることができました。学生にも慕われるようになり、大学側も身分のない牧野を助手にせざるをえなくなります。教授の嫉妬により一度解雇されますが、彼に同情的な教授や学生によって復職できました。牧野の存在は重要になり、辞職を誰も望まないようになりました。辞職も牧野の申し出でやっと決まったということです。

○その4 妻の苦勞、感謝するため「スエコザサ」と命名する

生活苦のなかで13人の子どもを生み(生存者は6名)育てたスエコ夫人は生活力のない夫を支えました。図鑑の発行費や生活費に、当時で1万円の借金(現在で1千万円)があったといわれている。それでも牧野博士の研究を助け続けます。夫人亡きあと、牧野博士は新種発見した竹に、万感の思いで「スエコザサ」と命名します。

○その5 雑草という植物はない—野草と

名前を知らないだけで雑草ではない。野にある草と提唱した。

また「雑草魂」として逞しく生きるイージで使用しますが、実際は弱い植物のようです。人間界の畑とか道路に逞しく生きていますから強いようですが、人間界から離れた森林とか草原には生育していないので植物界では弱いのです。

○その6 スーツと蝶ネクタイで植物と対面した

写真を見るとどんな場面でも正装で、笑顔で対面しています。野外採集でもこのスタイルは変わらなかったといわれています。

「植物に接する時は、敬意と愛情と尊敬をこめて会っている。その気持を服装に表した」と常に言っていました。

牧野博士の生涯をたどり分析してみると、現代と変わらないものが見えてきます。

牧野博士は学閥、年功序列、専門家からの差別や嫉妬に苦しみます。経済的貧困や明治時代の家族のあり方、夫婦関係も背景にありながら、偉大な研究成果を残し、かつ多大な援助者が存在した牧野富太辺博士は素晴らしい人といえましょう。

3. 未来の希望は教育から —教員の現在地(4)

—再び部活について—

戦前の部活はどうだったのだろうか？

時代によって違うので戦時中「ひめゆりの塔」で有名な沖縄師範学校女子部・県立第一高等女学校（共に13歳～19歳の生徒）の昭和14年～15年の部活を取り上げます。両校は同じ敷地にあり、全員寮生活でした。

体育部関係—陸上・水泳・弓道・テニス・卓球・バスケット・バレーボール

文化部関係—ブラスバンド・お琴・園芸

寮生活ですから授業後は全員どれかの部に所属に活動していました。内容は現在と同じでしょうが、上下関係は厳しかったようです。戦時中だけに「軍国少女」の育成「皇民の育成」「心身鍛錬」を教育目的にしていたので、集団活動を養う最も重要な役割を部活は担っていて、生徒の自主性などは全くありませんでした。

さて、現在の部活に戻ります。部活を経験した人は肯定派が圧倒的に多いと思います。部活によって経験できた「友達との出会い」「達成感」「勝利の喜び」「敗戦の悔しさ」「技術やスキルの向上」「自主性の芽生え」など 魅力と楽しさを十分味わえたのも部活でした。

それなのになぜ部活は「ブラック部活動」と表現され問題になっているのでしょうか。それは、今まで隠されてきた「子どもの苦しみと先生の負担について」が叫ばれるようになったからです。時期的には2015年以降に社会問題化されました。

・教員の負担増加 ・指導者の資質技術の差 ・生徒の活動時間 ・家庭の金銭や送迎などの負担 ・活動費の問題 ・安全管理体制の不備 勝利主義への是非 ・地域の理解と支援体制 ・行政との連携と調整など問題はいくらかもあります。さらに重要なのは部活についての評価がバラバラなこと。生徒の考え、教員、保護者、スポーツなどの関係者、行政の立場など、統一した答えなどない。そこが一番の問題です。私自身あくまでも経験上言えることは、次のようなことです。

法的には、「特別活動」に位置付けられていて、学習指導要領(高校)に「生徒の自主的、自発的な参加によって行われる・・・(略)・・・」となっている。これを尊重して「生徒の主体性・自治性を尊重する活動」を主体とし、「教員負担」を早急に解決してほしいです。そうすれば指導者の体罰・暴力・ハラスメントは減少するでしょう。教員の負担減のための地域クラブ移行の実施も進めて欲しいと思います。

※参考図書；日比野恭三著『最強部活の作り方』 文芸春秋社 2018. 4月発行

4. お願い

これまで自由に書いてきました。会員・編集者に感謝申し上げます。それでお願いですが、会員のみならず方も書いてみませんか。「子ども、家族のこと、旅行の話、動植物のこと、ニュースの感想、エピソード、身近な喜怒哀楽・・・」などぜひ書いてください。楽しい会報にしましょう。